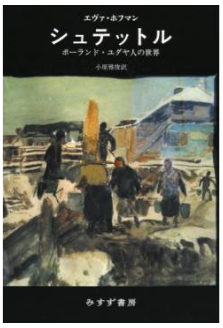
《新刊紹介》

エヴァ・ホフマン著『シュテットル～ポーランド・ユダヤ人の世界』

小原雅俊訳、みすず書房、2019.3

「ポーランドの風景に一面にちりばめられた〈…〉数多くの〈…〉シュテットル、これらの村や町におけるほど、(第二次世界大戦中の)破壊が徹底的であったところはほかにない。これらの村は今もなお存在している。それらの多くは今なお美しく、強い地理的な望郷の念ももっともと思われるほどだ。〈…〉いくつかのシナゴーグはまだ立っている。そのうちのいくつかは放置され、見捨てられて今にも崩れそうになっており、あるものは保存され、修復を施されて過去の威厳を取り戻している。村境の外には、雑草と野生の灌木が傾いた墓石の上に一面につるを伸ばした、小さなユダヤ人墓地を見つけることができる。ユダヤ人がナチスによって駆り集められ、射殺された雑木林をポーランド人農夫が私に教えてくれる。〈…〉これら、あちこちにある不可思議な遺物は、何らかの消滅した古い文明を想起させる。しかし、かつてここに存在した、生命が脈動したユダヤ人の世界はもはやない。小さな商店や屋台、ひしめきあう人々、荷馬車や馬、イディッシュ語やヘブライ語で発せられる響きはもはやない」

「ホロコースト後の記憶の中で、ポーランドは特別な位置を占めている。ほかならぬここに、戦前、世界で暮らすユダヤ人の大多数が住んでいたのであり、ほかでもないここで、ヨーロッパのユダヤ人の絶滅が起こったからだ。〈…〉ほかならぬポーランド



に、絶滅の標的にされた人々の大多数が暮らしていたからである」(「序文」から)

『シュテットル』は、真の多民族・多文化国家であったポーランドで、ユダヤ人がポーランド人の間で、ポーランド人とともに暮してきた六百年の歴史を背景に、ポグロムの、次いでホロコーストの残虐に見舞われて歴史の闇に没してしまったポーランドの東部国境地帯にあった「シュテットル=小さな町」ブランスクの壮烈な歴史から見えてくるポーランド人とユダヤ人の長い共存と分離の実験についての、稀代の語り部エヴァ・ホフマンの、ことのほか興味深い本だ。

本書にはポーランド・ユダヤ人の歴史のすべてがあると言ってよい。ユダヤ人の歴史のみならず、ポーランドの過去と現在、未来を理解するためにも、ぜひとも読んでいただきたい本である。

(小原雅俊、東京外国語大学名誉教授)

♫NPO 法人まずるか北海道第 8 回東日本大震災被災者支援コンサート「私たちは忘れない!」(ピアノ:遠藤郁子)で、日本ポーランド国交樹立 100 周年に因み、在札幌ポーランド人のみなさんがポーランド国歌を合唱しました。

光塩学園天秘ホール 2019.3.9

ポーランド&ニッポン歳時記 29

巣作り

最近、我が家の窓の向かいの梢に二羽のカササギが飛んできて、巣を作り始めました。仲間たちの後を追って飛び回ることなく、せっせと小枝を運んできては、丁寧に積み重ねたり、整えたりしています。毎朝、彼らの作業を眺めるのが楽しみです。

błękitne niebo	**青空や**
dwie sroki wiją gniazdo	**カササギが巣を**
na naszym drzewie	**新築す**

Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

jasny poranek	**朝夢の**
granicę snu przekracza	**境越えくる**
klangor żurawi	**鶴の声**

Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

黎明の四時打つ時計余寒かな

新元号蛇穴を出づ日本かな

伊右衛門の茶を飲み春の句を作る

岩見沢市、霜田千代麿